

ふるさとへの回顧

千葉県市川市
賛助会員 山口正晴

史談会の催して、内所船頭所の現狀を見ながら、五十年、六十年の思い出を語る「ふるさとへの回顧」、わたしも紙上参加の積りで、拙稿をお届けしたが、さらに多少でも書き加えるよう御希望の向もあるので、追加してお届けした。

旧い思い出は、いろいろあるので、次ぎの機会に書き添える。

(一) 五所明神のまつり

われわれの氏神、五所明神の祭典は、年に一回だったか、二回だったか覚えていない。少くも春の祭典は、優雅の行事であったと思う。

神輿が、笛太鼓の合図のもとに明神の森を出て、お旅所に向かう。

先代の橋佐古官司が、騎馬による荘重な装束で、神輿を引はじめ行列全体の指図をとる。一幅の図を見るようなものであった。

笛・太鼓の調子にあわせて、行列は蕭々と明神の森を出て、明神馬場に沿い中村に向かう。その当時の明神馬場の緑、今はない。

お祭には、イキのよい地場の青年が、競って参加する。喧嘩はつきものだ。だが明神祭には、そのいざこざがな

い。お伴の人達は、黒紋付きの礼装に、仙台平の袴といういでたちである。

そしてその上、中村、白坪や、街方の実方者が、同じ様な礼装で要所々々に見張りながら、行列に加わるのである。これ程の大きな規模の祭で、こんなに静肅な祭典は見たことがないと、他郷の人には不思議そうに話すのを聞いたことは二度や三度でない。

大手前の広場が、三ヶ丸の広場が、神輿のお旅所となることが多かった。帰還される途安置され、街は祭典気分一色にぬりつぶされるのである。

奉納の余興の中で、江戸青年による杖踊りは勇壮なもので、いろ／＼の神楽の中の圧巻の土踊であったように思う。揃いの衣装を着、槍の様を杖をもつて「ヤーオイ ヤーオイ」と音楽に合わせて舞う。まことにリズムカルというか、適当にスピリテイーで見ていて面白いのである。

明神の森、五所神社は、われわれ佐伯生まれの「氏神」であるが、官司の橋佐古さんは、彼の令兄を通じての旧知の一人で馴染も深い。殊にその長兄は、お友しと同じ職場三箋にて苦楽を分かちあひ下ら、長崎にて原爆の惨害をなめ、後広島大学に転じ、程経て死んだ、佐伯出身の青山貞一郎である。

とミスガ、この氏神には、境内の神域にも、神殿にも、その他境内の建造物、或いは古事古跡等あまり突かれるものがない様である（わたしは不勉強で実際にはあるのかも知れぬが）、自然佐伯に帰って来、明神様への足が遠くなるのである。

その辺、官司さんや、街の文化人等でお考えになつた

らよいのではあるまいか。

もう一人は、千葉県の神職の息子で附合いはふるい。

「俺は神主の件だから、本来親の跡目をさへいで、神官を
する力が本来だが、神職ではくらしが豊かになれない。
それと、学校も神官からはなれて、高等商業を選んだ。
親の選んでくれた道、決して間違いではない。」

とよく話していた。この友人も、終戦後親の跡目を継ぎ、
神職となり、程へて物故した。

近來、お寺さんでは、幼稚園を經營したり、アパート
と建てたりすることが、一種の流行である。

観光資源のないお寺さんや、神社では、又ホテルや料
亭などと提携して、結婚式や披露宴まで手を伸ばしてい
る。

明神祿のご祭展を祈るや切である。

(二) おんばらい

「おんばらい」これは地方の方言がなまったものである
か、或いは語明の「名称」からきたものであるか知らな
い。おおかた地球の自転と公転、また月そのものの自転
公転の取り合せによつて、丁度その頃、佐伯地方での高
汐は、地方の名物と云うまで、その満干差が大きいので
ある。

やがて薄暮ともなれば、どんどんとその水勢は増し、
「みちしお」の時と同じように、汐は深まりゆく。料亭並
か、海下の石段、お作重染の石段、また礼場の石段、子衆の
汐では水没しないのに、この日は、満潮になる時のよう
に及びに浸りゆく。所内の人達は、老幼男女、手拭片手
に浴衣か、襦又茶で手近かな場所へ行き、そこで水浴す

る。わたしは、料亭豊澤下か、礼場あたりが近かつたの
で、その辺で水返し帰って来た。

別下この間、呪文を称えるでもなく、幸運や、無事息
災を願うことも無かつた。至極あつさり「おんばらい」
に浸つてそのまま、よい気持ちで家に帰つたように記憶
する。

考えれば番匠川流域が、一大プールとなつて、そんな
で、プール遊びはつれたって行つたようなものであつた。

(おわり)

[余白]

鶴城 讃歌

佐伯の城は大手の門南に向いたると覺えたり。山城に
して城門並に深窓は山下にあり。其の規模竹田の城に比
すれば小なり。然れども又名城なり。

佐伯城下は海に浜したり。満の敷凡そ北十九浦あり。
土地せましと雖も魚塩の利多く士民富饒なり。

鶴城樓閣海之浜

(鶴城の樓閣は海に濱と)

松緑沙明木起陸

松は緑に沙明は木起陸

百浦魚塩民自富

百浦の魚塩は民自富

風帆相接浪華津

風帆相接は浪華津

(玄關淡窓「浪華津」による)

言うまでもなく玄關淡窓は日田の碩学、十四才の春幼学の時
松下筑紫をたよつて佐伯に未遊して、数か月滞在、時日は舟を江
上に浮かべて番匠川をさかのぼり龍護寺に詣で、あるいは遠く海
上浅海井に遊ぶ嵯峨の瀧を賞している。
この城址、この川、この海、そいてめがらす山々。わが佐伯の風
物を大いに見直そうではないか。

(明柴)